梅の枝

九曜文庫

御母きさきもおはしまさてなく〳〵御ぬ
をさなくて世の御なやみすこし東宮
にておはしまし二月に御かくれありき
おなしとしの冬これはやかてはまい
りたまうらはぬ今さかゆめの月
ならはてたゝしきはいかに覚けれ
ゝふしなやみふかくてほかにも
たまふのあさせの大鏡にて
まいらせられしを御なんすること
にける〳〵のなくおはしましてや
あきんとおほして二条院の御

くらゐのまつ御代てのみち物と
色ましさ世々てはたんしくら
ゆうよにしきあやなるもなきと
たきなきこれもちつしうこゑやら
かんみちもれてちまき法へつ
いろみのおほいまとものこゑと
ねかひのしるもに古流は
らはなしめんにこゑりしみ
あてしまつまでもみやいえん
きこゆとおほく今の世の物かすくなし
くれかわれときゆくのぞんしは

あまた世をへてしきしまのあや
うすき物をとは人ごとに思すか
もとものしりてまれなりわかなを
さねのはの清きくにくわ
あまたはゝ世をへてくさの
あまた世をへてかのしきしまの道の
くちも物しらずこゝろめれくか
きのはのかうかもしかも志を
もとつしちみをよろへてうちめく
ゑえらもとにみへてかうすれ
ことのくらし来ましたところわれ

衆おもくはしん殿にたてまつりお
たしかにしてさんましの御はま
志んのねころのはうをつくりてか
侍りてかんはさん所のきん日中も
やそてあなせ所の人をもまんしの
かの比丘なからひそてよ侍志侍ら
いとにかへしなさせ所て
八条の式部卿の御かたとにこ之
うきうみよつてこん所の世所はて
ひみ土うみ所へまち白いの梅
さ所のもうら申きはさてめあ

ろへしとおほくの所にへ人の御れ
やをれよ所あろいたさ也所に
ろうにもおもへてさすゆ人金ま
ぬなうすけてしとも也れこみ
きのゝめれし所つゝ中にとか
これの精ともの屋にかゝみす
かさいとも比のゝ人ともめゆれ也
さ由よつまめしう屋うかさ
御所つよとこうしれの所に
くし所つゝん中はいとも御とく
まじゆえんしともとうなあらせて

いまくしおはしと成をわたらせき
十日夜すこしよめしておまへ
ちゝお揃さうわに色々かし
かうおちすたいはしよ五部御経や
まうわ御つかい御つりきこへ今日
あすにちうめしにまうしてとまいに
也かし御めしーしよめしとかはらかゐ
御中かわしいるもちくそれ
てこのれこゝろてきこゝし何たせ
御ふるかとめてりくおいはゝら
はしよ前興院よりとして於

すまてめら梅のえにてはゝはまとら
御みをとしまいまめしてみたいし
ますうしてと何まいてへいちか御
せうれうこ御むてくんまいかつ当よ
ふとおゆしうたはゆしたま広
かしこうみて伊とかまいてして
こゝとゆめしはきさわしとゆめ
やうよつれきちしゆつる絶
あしとて御文いうつて御所へ
のうとに御めしれいかかうく
るそておはしきてまかうたしはく

まゐらせつゝ日暮にこえんまて候へハ
みえしのえてまきのはさくらは
ことやさてみゆるしくりもとい
ゆかしくて咲花もおもしろいやうに
なまめかしうそれし給つかえん
れう物はさかりさなそて御た
とゝめ給へかし
花風に散のこりの桜をとゝめおき
うらやましく袖にちくさまめやか
わかれてとおもいしにいけれとて
ひとつしくさくすの御筆にて

の中将殿はかりとゝめさ
此給てつく〳〵見給て桜の
さかりのけふはなかれさへも
女はさりくるこのつきを御ゆかしき
それはなかにてゆめのへの花と
おもひそめぬさき給ふ宮このの
こゝはひろくて御みちかみの
まはしくろへあはれかうくか
うち給とこゝみてうつ夜の
とかくしこかれ行はいつも
くるしきものにさて

御もれ出て帝御すくせあれ
は升卿
花宴にてとうしのはちる
人のしめ帝亀ゆはしかと
やよひはつかあまりのころ
しきやうてんのもとのめ
三人の女へてにはしかと
たはたをのこりめましときゝ
すこしてひとえんゆくまれ
うらなひなくてきこえ
中宮よりさせたまはむも

てとせいつかたへのちはしに
きしかのしかはんとてへうしら
あ神ゆえゆえんすらうえかしたれ
めぐしもうしつきへてみせられ
まはしれくるましてまいと
中宮あへ物ものしけはかくす
おはしますきさゆゑもわと
てこんはりもさてしけるま
御かしてはあまも世のとものく
ありしてはじめ豊はしめた
うつろみもしときてはし給へまゐ

ほまくてよひしうさすしてや
さしなるとしいけるもなる縫
みえんせんとゆめしなりていひわ
ともめしてうみせさなりさう
人のもなしすやしなきしなる
とといししめ日いともなす
んをとく小つらいとしてさかとう
つさてかうらさまきなりいてある
うらよそともせ更さ不なまらめ
をとひなるさわう御よてきの
さうまのさをしてさせなるえん

はちんのんかはのほとわにしか
すこえてかしは和田殿のき
よそしはらみをなりちらしうほま
せなるつらと惟光は宰相の二は
兵衛のれかめてしまう紀も
宰相中将しかて御めにまいるせ
なる子てしてきてんさもも
あさわて侍るてはさうしやと
おやしなるあれしかしま
いとしもちをけしいうこらん
うめらさとしく仏御ゆきにあ

たせ給つゝゆるさし給はぬをときゝ
あり給ふよしてきこしけるす
なとわさとにつはもしとさかよ
中よきのはにのなかりさこゝ之
とゆふくれしやりけるはいと
せきかりいはとくたはちはすく
許てちのまめしうかりたね
うれしとしてさめ給ふかほ人
のおほんをとみくさけうかに
梅花をえるかやうよつまめし
うすこしたる御前のきこいと

きてめほりし たのはやしく
まりしはけれはよめくるんに
をはりまこれしゆゑさる色あり
しとあて給よ夜けは常にえ
人とけのくゆくまてとえ思ひ
かねくはしたらいてもやと
くもゆらひさえありけてけ之
ふは心ゆてくかくかよう給ひこく
さあたせ給へとせき夜うねもし
めやうもく重しておつらし
見ける御常にとけくはかけら

白いゆきてまかりなにけくまんこ
とまあはすしとおほしてくれえ
かれはゆるとくれあやさなの
朱雀院のとうはさせ給てにし
むかしは猶居てこにえていにいう
まいりまいらし百婦はつれと
思いえてとかみ似たとかまよめしたち
こともたつめさるおよてすく
まさやしてつほとをもむとも
あすきさめ給はまつれなよ
御方ん者あるもしとゆめし給ふ

月さし出あきはおほみきかと
まつりおほしめしけり物かたれと
しるともなくる月は新日かく
きは雨は久はの色をこし咲て
花の色をちつしきつよあをえれ
おのちもういしゝよす白いみち
て人は御思らてこえんかやく
人所のさうかもあすはゆあれい
のはらちすしくよゆことをはす
そくれとして殿上一人あとのまさ
かうやしてゆしき筆は竜とも

きこゆられ猶はいその頭中将
りやうゐんてもけさんいつもしかあ
ゆう川のそこよりあさ紅の御さこ
とくもめすこれゆけまへみなし玄
てあとくみいろりの御てもあも
あゆ次中将紅こんいりもて花
やうのみまきもてころはと伊たと
おりしはくたゆ宰相の中納
らこ絶も吹なおもしよりいあら
てうし雲らみよと役らりわ
ゆきくしもの弁のかなるいつ

まゐりて被うしてゆるほと
こゆめしわらかてのへよさむ
はちをりなたまこうかしまお
ある宰まおもくもさうけ色し
なまこまさくしかぬ禄ちお
うしきらはもあそいちわ御
かうしともにいうみ家
寛ににやうやいとけくるまん
いしのはる花はあらわに世もと
御あへしと申しなへき
色もかとはさわにし奉六

たかき君たちもれむもいつくたえん
頭中将よ近へさかて宰相中将
小さ哥
宮のおくつの程もおもひ思し
かはらぬをを世々の代もれの行
宰相中将
花あかしてけりしめゆる花成に
ちるしたつみえてゆきやらぬさき
情すくもしみかへりけん給
弁少将
東ふよ有花も咲きことしす

度々の御代にもかはらぬにかくまし
ますしに明らてよ面て子まうしえ
ことに御道わかよ男なりけれ
卿の御おぼし御けしいて
こちたけし御わかおかき物ね
たつとをへて御車よまうさま
はしめ御方
花のさかえおのくの袖にやゝて
こまやかもとておりやまとのへ
少なる道えいてくれしうつやと
見ついかに御くらへあしすか

やしろへといふ
先帝のとき卿今ゆりなん
花のかしたをときそへつゝ參ます
あふみのくにはさかうと道
え伊とてかのうかはれきて
はるてらかもとへもしかね
さゆよかれなかゐらさこそか
川きとさ様ゆうくてかしのあ
とにあの時よかはにゆえれ
おりしきすの今あらいそ
をきつしてはくしあけれ内侍

みこともやうてこ殿つよ御供家
らんもしはけみてよ中天下御女
いまんは中御方へ女房とし
にうせうる散きてすんてて御ゆ神
の時よ御とちなおゆとなかのか
まひよ般とも御宮へいてありた
しとまかんとしもの御き御おゆ
はしまよみもしきさ御女わんめて
きめやきはう女もとすうらん御うん
せうは給きやすのらの世のため
しほやと四すそくまいらせ

なかなかにおもひのほかなるいかなる人
きこえさせむとおもふなるをたのむ
さりとてはかなきことにつけてもうし
そのおりなとあなかちにまうしいてむ
うれへたくしとのたまへるほとに
かの宮にはいひつかはしてあさましう
ほきこえさせなとおもひはへるさま
なみたのみきこえ宮にいひもあへさ
しけきいはつつみとあるをいひやりて
あはれはさるるにかくおほかたのおり
こよひさらにまゐりつつこの程とへし

心なきつきしうてなほ
御世まいとあはせたるあはれみを
けさそしのふし御心のなかの
きうしなやみなはふたにとこ
とみゆるさまにおなしめしても
かうしと例のさてけしきまかなん
を中くやかてこ宮にまゐらす
東二宮御方にまいりて女にいれ
猶もまゐらせしもいとおほつかなく
おりしも女御も女にせめつとも
さはいまつにまいりてさとなき

おほせとありしはとおくおほしなさ
すさ御つかひとしてかまくら殿よりに
てやまうしけんと左衛門おもひた
大将なりともおほしと申つかはし
ときさうしめしてつとめいく
ちからおよひ也よのみにへ人のまらあ
まうけるなかにもてうしめきら
ゐんとうてひこそは人々すゝめそ
うけ成さきみやうきの姫君たち
ふきさためいなあかんかえたる
しとの為いて御まへ召しれい

めのはさくまりしこゝろのやまう
とかうもよし承とにきて給て左
大臣殿は三人なまへ召しねおほい
もんてんときこえし御まへこそむ
うけ給との御承しまいらせ給
何とこめ志御いて御まへ召しの
いはうとあそはして召しすゝせ
給つまる太刀小ときさこめさせ給
参りともへりして何ともやもとゝ
久くて御まへ何とも御姫乃ちかゑ
ここをやしかるのちに御かへし里

はすくれたるみちくの上一品と
とおもひあはせて宮にたへの
きこえ給へる御さましもみね
ことふりにたる色なるにはらしくいみじき
やまとうたのもとしほかきそめ
せ給ふまじく大臣となかきよの御代
ところ世よに名たかく侍し御いはひ
めでたいさいとおほくさうらふね
よろづの御事にしてはれたるにこそ
さかりに源氏のはしらはなれなと
ましてんがうくわん今の世を

いかでかくのこうてかやには
かかるよいとはかなくて御きもち
御よろこびいまきこえさせ給ふ
院を一品かきよいてちかんを
まうたつるをましたとよ
つくりて候ふことにのみ候ひける人のうへにもいはへのむかし
うまれ給ふ女御子みなさまもちつかひ
しもじもにてもなきてかん
おほくはへるかなしく中宮
今みかどの御門のれいを
ちしるいゐつるし一くかなし

いかやうにこそあらぬとえてたゝ
ことにおほしたるやさしさて候
御まへにめしおかれてゆめのしれ
うしくやうたつよ思ひしけれ
御つかひしてさうしをあつかはせ
もとより家をよかくうしなはんれまう
ものはつまとゆめあはせうれ
なかりけりゆもて人なかりゆゝ
いむ家はけてはこ御心にかゝしき
まことふとやとふれつむしとうら
さてゆきそのゆへ御ふか入道

家はけてもさてしもしくはなゆうう
なまめかしくすらはあつかしかと
よそにあふみて色いそすみわ
しに院の内侍のとこ申されは今れ
世は申さとよみえすれしあまわれ
ほまるしくせそうけうさけなとと
そのはめとてすんさいろ院とこそに
と我ともきさめなとゆしうにら
うしなるもしてかなすうりゆれ
小やりけりつかはしのなかるつこさた
こしりつねをあまむなけしくみさら

わしにらむしまいしとけなかりし
ことゆしるめましとて申さうう
ぬかうしともいうもしらへて
あるうしさしかしてみせうせ
さ様の兵部卿の式部太夫宮み
おしやんもれせん月何か一よ
後いかくなりしきしたみ里
あきやとも患ふかちすへしや
と我かめはしほふすゝん筆な
所いなくこえしつて御すひ
取くまたちすめ将せされこ

あまた人々ころされしかは御はして
うへさまよりもいはれまゝしやうに
おほしめふくれまいらせんつうすへき
もちこそかせめくちなゐめしたち
なとされ給こゝのへにゆくゆきたて
四人よりて宰相の中将殿へまいりて
の兵部卿の宮ともおほせの
頸中ねかはしにあしてもちゐさと
見くよろこともの御玉みかく
小にとむへつ生みはへかせん殿
取しまさへおりて御きしなふ

むさしの過てあさみかゞり家
をしうりけらくちあちにゆうたてく
ちあうし是いともし侍て御心
はゆくすゑわかきもものの
と女てもつゐありわれに給ふ
侍まへよ人をけりけす女二三人
ありしすゑかしもちゐ世給て
よくけふかなき乃みかと
つよれやれしこえりしおはすよ
ならそしかぬきわたりぬ
みとあけまゐしてまゐらせ

よまさりしらとなりしち
うらみられて魚はなをしくは
てほいめらしけつさ海
にて世にはしめてこしなき
あまかくもらえりて
いまそとわかなみしよそねし給
なろさ海さへかんなん人には
ゆそてめへよ御さ海兵部の
宮まゐりもけふとたのまれ
みとらよて御なみしなもの
なとねまかりしろくさ世給てやら

ゐまゐらせしにかゝるまゐりまし
たれしらすをこよなきまてみえ
しさふらふにめとりはもたれ
おほしうちゐもくくのれたて
たくらしきつかさうしこれも
てみくるんようかいしらたへ
おもひきよらもまてよ
こともおほしくうしなみて是は
たつらかこころ成りけさふ於
よしかせなつるしとよつらい
をのしたの成ほうしてさて

まくはやとたつる成きわやうそ
はらんすまいは次くれてさもは
ぬすみてとたくゐあそにて伊
おほう筆することもとなきてか
きたらしたつるとう書もこそ
京めきこそあんさうゆうてこも
てとえなそてたくみくすりつるも
かりしすてやまさ成まうしくそ
うきたつるおとくはらんしおと
ろあめきそまそていましたつすこ
そまとはまいさうしに筆もちはすて

はなしやとおもふこそはかなく
よはの中におもひすてゝ包寺
筆にはほとさわやかにかきたる
はらなとたえかはれはかなとは
おはらしとりかくしはへ
あやなはかねまさりてはへ
ゝきんにはゝんともゝ紙の
いとすゝみたにさてもよはつゝ
すかれてゝ給へとてゝとえたまふ
よこすはとつもなとほかになる
こうちうりしたの色すくはなや
かすみてかすめるおほかたは
うれしき女てはなかしふかく
ゐそくはつゝたまりぬきかへ
なしてんはふ人は御さとみんなへく
もてよなかれはふみかへてはへく
らうまししておよくてはゝしや
は色しのみあたりいもたら
われにかうかれもうはゝのうつは
筆かよせてゝかうにかきはつら
みんところはなやしなし給とも
まくはふあいきや物きみまは

しきれはことはつよねやとゝりよ
なとかう宮やしなひと右大将
きこしくきこえ申しこけなう
すらひのとおほえんてうれしれ
と兼はゆゑてよ宮めゐら
しててゐくわくへ合ひまうれ
ちうやともかもしてさうめき
てえわきつやと女はゐとほま
かゆもとわ出ゐりす兵部卿
すとゆましてまして院かさわ
まやと院てのほうしとあれ

のくよりかりぬしに宰相中将
かはえんはつきほいはしうにのれ
ちしれくきゝらはしのおはれ
たまほなしなふをれうによ
おてこなれうかぬつきまうと
てつうしとみさう百あやとま
まいて伊まめしうひきこえ
こともし宮しるかてはかす
まいこうきさはつるたまとも
あめやしなんとよりすこれ
いてまうやしめへき物かけとまう

し給ひて何事をも捨てられ
のしえんてよみ奉る御子に
てゝし伊勢しうめて中の給
今日又て此ともてとの有ひて
しさきのく乃さきしこ此かしを
をえらひつゝさ御つる流にみてまよ
御こ此侍従して有よさうみ校
かんともとかちよりかくそのうみ
この古萬葉集とえらひて
世のつる巻延喜のみかと此古
今和歌集とのしぬあさまか

むかしんとと何きてみかしぬ此
これもん此のつゆきのおりしお
なしよむ玉のちくもん此のゝくみ
法花しおしなるめうきうて巻
てにとまゐ此のらるへ入ゆくみ思
うかけくさせ給つる物はしか
物しつしのしきて御らん
すこに何きせぬ物うなけこうそ
人とかかえれともしたしむ
まことにもなとめて給ふ
屋うてこれいとめもすをたまね

せこがしもえ侍りもしにかま
みさしくてんやしと申したかえ
けうおもしろくおぼえてくらめく
きてとなしかのしくらうも風流
侍従よかりけれなきものゝ主
さしう申しけれ　ちんの箱よ蓮
てつかうきこ申すさへてまて
まう風流なる文二通かたくまし
なほさこめてまゐりて世中まで
かくしおほしくるを上中下の人に
とさうきやもとも御申しめうして

なつなる世にはかなきことゆるたら
くずれるを小まも世にすたらさと
人代はしかるゝ世にわけり
しまひ給ひてならぬ世にうつりし
よろづよめはしうかくなりたの
みとも人はなんとまうすとかゝ
けるもまゐらせんともなん申
是も四つ二紀なり人世におほけ
うやまうて御絵ともとみなさせ給ひて
あるにうけたまはりの日記にすゝかを
ほく人しるすんとおほせと申ま

すこし世をおはしまさしか
しかしおりしえしらてさこそわ
かなしそらされおもくにこ御はい
れきこを人のよふくてきて給ひみ
さりぬりとかくさてしと
おほえと姫君の御事をも案しなきと
みそみいてはつしくられ
うしをも世にまてしくらうさめ
御あはつらかとてるらしき御難く
さりつるよこの人のゆきかたて
なあかし　雲はなつらうあれ

のよろしくすゑんかりこちをひ人々まう
されは人の御心地あらしなはみ
かおいきさまし　はひ金ひかとも
しるけきさて一ともはひ人もさえ
御せんをもすかくとこうしる御み
なつる御もし給ひと宰相の君は
きてなへてさりしはつる手なりし
御日をとしと思へは君もかう
りてあし　何ゆへてはさるこにか
このさま御はいのこりしかとくるみは
えんのはゆのしなてかしかりて御おもれ

ほうれしく候へとわかのめしこうし
ゆゑにとゝもに納言よめりやうて
みしんのかみとあるへしおとゝの
ためやしくちきてらゆまうを
おりしちやみてうおもうわかのと
是いかんにつけ右兵衛おとゝ中
将のくまれしれまし給みつゝ
せかゝらとゝいいともはいけてあ
此らとの給へと物しきこし給ハ
すゑしこゑもうらゆまゆてさ
かうい給ゑ我もにうしこなれ
るふこまちこうふへてもあはしさ
ありしかいてさせまうしきれと今
みちいあそするかいのおはしへ
給ちまうたあし少えにの也き此
御せしてそ物されいはふとこ給
にのまやしと世人もおしたるかん
をまうせれ引こゝろにてかのし
さうしにあやしてなにくてこま
無かをく人うやきこてこれやうなり
ゑせいのかとゝもこゝもりしもを
なすうかやとはあるね物しりまく

しき宮けんきなきつらしきかりなわ
家からもおい出る身分よ
更せすとこつせくはてゝの体
人のあやゆてもちの後そつくし化
れし深さや出り人とにくろた
月侍そ行くしいそとにおいて
世よろしめなめく嘆さくくる升
あさくみかとりいみ事はしよう
ちぬと思まてちる悔ゆまみな
とものせるおれもをもの我のおを
めまは是いさけむ今さくさしたい

なたきさ女房にふてなんこのしこそ
人むけしもみるてものしけのもと
我有まし侍ことに思ひまて人盛
ともあて身にのもらみとお
悔なん河井のかつしとなやまぬ
ころしにやまわけて人ゝ侍るに心
ふるおなすみ恵たんしことる梅
しけのとも侍思いのみさふ色紙
なるいてもしいおや我をよ津も
りしいおやなる世中のつはよ
けりともに人くるしみ家をゆき

人いこれしとかうとふよせても
こ人なへきそめ人のめろんけれよ
らうたへのいひ給ふなることのまか
とやのたまはしわかくかなは
御ものはかいさうたゆへいふもの
おもほしつさめにけていとつれなくて
ものはかさ御心のことおもひわかることなく
小人なりたすいおほし女の御
詳まやうにおとの思ひなけき
御いかくれはまたそならしう
宮のかたとおほしたうとう人

ほかなくおほえらはてかゝめもし
御ふ御みなて思ひあまりわすれ
おくにかよのゆきさりにに
こら御たれしとゝと思ひなりせ
あまりる人こそあわらよ人ならく
もうしいもとまあおれしの御
申しおはしや中務の宮わたり
いとのかたもかしこきなりてさ
まやとおほしうしもあらぬと人
はなのほしきおもひはつくし
もなよしうふもし思いてさる

こゝにあはれなりしの情ありき人の
御心をもとまうしおやこつくら
まつりはいしよそうそわかれ
とて引出の人のちよきへしやよふく
ちかいきそもとへもしきをまうし申し
これをみなとうもてのはへ姫
あつてこそうしきおもかれとそう
せちく姫はにこはうしかしらおく
くしてもきこはつゝつたけさ
かすみとあまりつうにせまし御
やまとみせてもしたとそ申

かくおほしつゝけてもなかめ
われなをもやうそてしらぬか
ゆめのあはれくはしとくかはなきす
こんおほしめしまつらのまゆはし
はる乗かしこくにはおもひ
なつくはしに御みあらはさすら
まうみなふこゑやうかそ
御たけさなかり世かはとにかきりと
ことわれといやくよつてかくとのか
もしたつかもうとめめ風あか
さよとてはいつしもとなけはこと

かやうにきこえけれとも、きこえさせも
この世はかいくの御らんしはかり
ひあやしとうらてとかしとそく
かよはし人けはひへもしきを